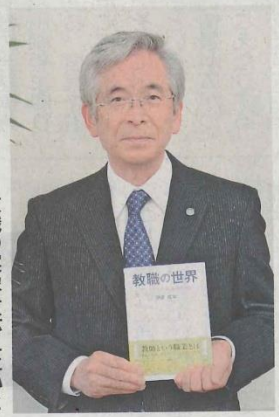
理事長の刊行本　紹介される　（6月18日付「秋田魁新報」より ）

くらし　学ぶ

教職の実像伝えたい

「教職の世界―」刊行　杉澤学園（大仙市）伊藤理事長

教員を目指す学生や現役の教師に、教職の魅力を伝えようと、秋田修英高校を運営する学校法人杉澤学園（大仙市）の理事長伊藤成年（なると）さん（65）が、著書「教職の世界―子どもたちの未来のために」を刊行した。仕事の実態から今後の教育の在り方まで、データや図を用いながら幅広く解説。「活躍する人材を育てたい」としている。



教職の実像を伝えたいと著書を刊行した伊藤さん

待遇なども、つまびらかに

伊藤さんは県総合教育センター所長や秋田高校長を経て、2017年4月に秋田大の高大接続センター准教授となり、同年10月から同教授に就任。教職に関心のある大学生や高校生が県内小中学校で授業指導などを行う「教師ミニミニ体験」事業を立ち上げ、主導した。ことし4月から杉澤学園理事長を務める。

体験事業では、授業に用いる学習指導案づくりなども講義形式で学生らに指導。参加した生徒からは「『憧れ』が『目標』に変わった」「仕事に対する理解が深まった」などの声が寄せられたという。

こうした反応に触れ、教職を取り巻く労働環境や、やりがいといった実像を伝えたいと思うようになり、今回の執筆につながったと振り返る。

著書では教員志望の学生向けに、給与などの待遇のほか取得できる休暇の種類といった情報もつまびらかに紹介。経済協力開発機構（OECD）による国際調査の結果、日本の中学校教員の仕事時間が参加48カ国・地域の中で最長とし、多忙な実態にも触れた。

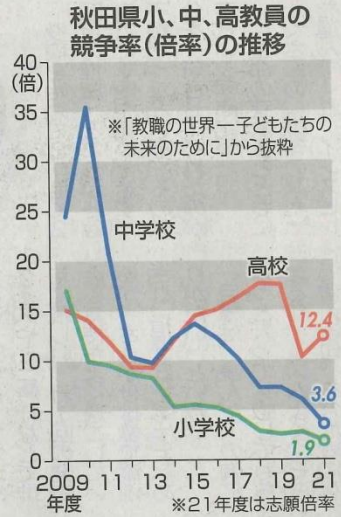
現役教師には子どもを指導する際の心構えを説き、教育的信念を持つことの必要性を強調した。

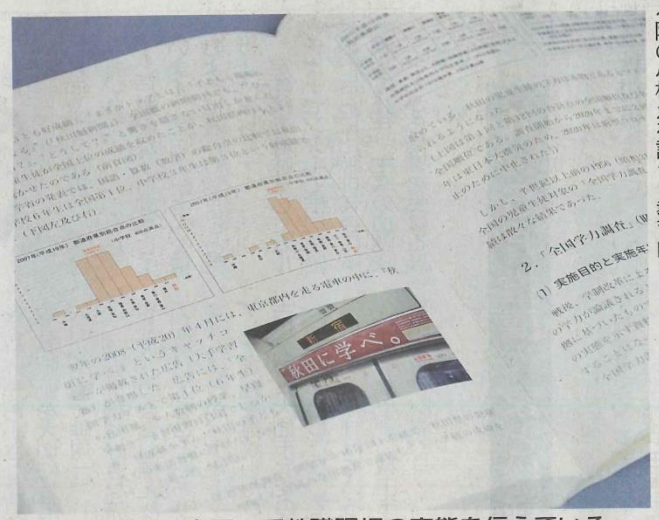
全国的に教員採用試験の受験倍率が年々低下傾向にある現状も取り上げた。著書によると、21年度の本県高校教員の志願倍率は12・4倍に達する一方、中学教員は3・6倍、小学教員は1・9倍にとどまり、小中学校の減少は顕著となっている。こうした現状を踏まえ、著書の冒頭では「教員の質の確保といった面からも看過できない」と記し、危機感を示した。教職の魅力を多くの人に知ってほしいとの願いも著書に込めた。

伊藤さんは「秋田大の山本文雄学長から『思いを本にしてみてはどうか』と声を掛けていただいた。未来がどんな社会になるのかを見据え、子どもが生きる上で必要な知識を授けられる教師が育ってほしい」と話している。

東京図書出版、税別1500円。県内の全高校と特別支援学校に1冊ずつ寄贈した。

（青柳洋祐）





図やグラフを用いて教職現場の実態を伝えている